

技能知の認知心理学的研究

教育心理学教室 高 取 憲 一 郎

Cognitive psychological study of *gino-chi*

Kenichiro TAKATORI

1 はじめに

技能知という用語はあまりなじみのないことばである。わたしは、この技能知という概念を、渡植彦太郎の諸著作を通じて学んだ⁽¹⁾。渡植によれば、技能知は技術知とは異なる意味において重要なものである。すなわち、技術知とは科学技術に伴う知能のことであり、その起源は西欧文化圏にある。さらに、それは知識体系であり、それゆえに学校教育の対象になる。一方、技能知は前近代的技術としての技能に伴う知能であり、その起源を非西欧文化圏に持つ。さらに、それは肉体活動であり、知的理解抜きでの繰り返しの肉体的鍛錬によって獲得される。したがって、マンツーマンによる訓練と長い年季を必要とし、学校教育の対象にはならないとされる。

さらに渡植は、別の所では、技術知を意識的知能に対応させ、技能知をユングの言うところの「潜在意識的知能」に相当するものとみなしている。さらにまた、技能知というものを、柳田国男の言うところの「常民の知恵」において特に発揮されているとも考えている。この、柳田の「常民の知恵」は、一家を切り回す女性において、ことのほか頻繁に観察されるものであり、その意味から言っても、技能知こそはまさに「妹の力」の中核である。

その上さらに、渡植は、技能知が伴うところの技能とは、日常生活における経験の延長であり洗練であるとみなす。すなわち、自然環境を傷つけず、人間と自然との調和を保つように機能するものとして技能を促しているのである。ここから、いま一つの観点である、技能知を「生活知」と促え、それは「生活集団」の中で獲得されるものであるという見解が引き出される。当然、一方の技術知は、日常生活とは切り離された経済活動の場において、すなわち金儲け至上主義的な、商品の世界において獲得され発揮される知能である。それはまた、自然と人間を切り離し、心と体を峻別するところに生まれた知能である。その意味で、技術知は「仕事知」であり、「仕事集団」において獲得される。

以上のように技能知を考える渡植は、技能知は日本人の伝統文化の原点に位置するものであり、技能知の獲得という点においては、主婦、芸人、職人には共通性があると言う。

このような、渡植と同様な主張は、いくつかあるが、現在のところでわたしの目に触れたものに限って簡単に概観しておこう。

まず、大田堯⁽²⁾は、渡植の技能知に相当するものとして、「人格知」という概念を使用している。大田によれば、こつとかんから成る手わざは身体の中にめりこんだ知識・技術すなわち「人格知」

であり、それはなりわい（生業）の中で育てられる。すなわち、生活と労働そのものの中で、しつけられながら、以心伝心で、見よう見まねでわざをおぼえるのである。それは、理屈ぬきにおぼえることであり、事物そのものとある種の間接的関係をつくりだすための身体の動かし方についての知恵を獲得することであるとされる。

その他では、たとえば、中村雄二郎⁽³⁾の「パトスの知」「臨床の知」「演劇的知」などによって表されるところの、「近代の知」のありかたを乗り越える諸概念、さらに、イリイチ⁽⁴⁾、山本哲士⁽⁵⁾などの「バナキュラー」という概念などが、技能知や人格知とほぼ同義なものであろう。

ところで、近年、わが国の一部の認知心理学者たちが、以上に述べてきたような視点に着目しているのは興味深いことである。しかも、一層興味深いことは、それらの認知心理学者たちがいずれもアメリカのコールの影響の下に、そのような観点へと移行しているということである。周知のようにコールは、ネオ・ヴィゴツキー学派とも言えるぐらいに、ヴィゴツキーの心理学を継承、発展させていることから考えても、ヴィゴツキー理論の文化・歴史的分脈で人間の行動と意識を捉えるという観点が、アメリカ経由ではあるが、わが国の認知心理学の中に浸透してきているのである。

たとえば、ヴィゴツキーやレオンチェフの思想を独自の仕方では咀嚼している佐伯胖の「文化的実践への参加」という考えを見てみよう⁽⁶⁾。

佐伯は、生田久美子の著書⁽⁷⁾の補稿の中で、この概念を展開している。それによると、子ども（あるいは初心者）が高い文化的状況と接触して学ぶというのは大人（熟練者）とともに「文化的実践」に加わることに参加することによるのが、人間にとってもっとも自然であり、適切なものとしたうえで、その場合に、師と弟子、大人と子どもの間には命令しそれに従属するというような、非対等な関係はあってはならないという。むしろ、両者の関係は、なかば対等であり、互いに助け合う関係にあるという。というのは、「文化的実践」の中に新しい価値を創造するという側面も含めるならば、大人あるいは教師の持っているある一つの価値基準を子どもに押し付け、強制し、その価値基準で統一してしまうことは、かえってマイナスになるという。なんとすれば、「文化的実践」においては、ときには異質なものを取り入れ、さまざまな立場からの「価値を探り出す」試みが許容され、それらを通してさらに活性化されねばならないからである。

佐伯のこのような見解は、渡植の「生活知」とか「生活集団」という概念と類似しており、注目すべきである。

さらに、最近出版された高橋恵子と波多野誼余夫の著書⁽⁸⁾も、本稿の問題意識から見ても、また心理学における脱近代を狙った試みという点から見ても、見逃せない視点を部分的にはあるが提起している。

高橋と波多野の著書の提出している論点の中で、注目すべき点は次の三点である。まず第一に、従来の心理学において優位を占めてきた人間観と発達観を生産第一主義に基づいた近代西欧的な、男性中心的な人間観として否定している。その代わりに、社会的弱者（障害者、患者、女性など）や文化人類学者がその研究対象としてきた第三世界の人々の立場も含めた人間観・発達観に依拠すべきだと主張する。この点では、バルト出身のヴィゴツキー派の研究者であるヴァルシナーの観点⁽⁹⁾とも共通するものがある。第二に、先ほど述べた佐伯の見解とも重なるのであるが、われわれの知識や技術の獲得の過程は、共同体の一員として共同体に参加する中で行なわれるとする視点である。共同体における他者との支えあいによってこそ、われわれの有能さは獲得されると説くのである。これは、波多野の別の著書⁽¹⁰⁾の中では「参加しつつ学ぶ」と呼ばれているが、まさに佐伯の「文化的実践への参加」と同義である。第三に、われわれの言うところの技能知に触れているところも非

常に示唆的である。波多野によれば、技能の獲得においては、言語的な教示はあまり重要ではないこと、教え手による手本（演示）が重要であること、学び手が困難を感じたときにのみ、教え手が何回か介入する、ということを確認した上で、そこに働いているメカニズムは「文化を通しての学習」だと言う。すなわち、教えるという意図なしになされているような環境設定が、学び手の学習を促進するし、むしろ、学校でのような言語的説明によって教えるという形式のほうこそが、日常生活ではまれだとするのである。

以上のように、高橋と波多野のこの著書は、なかなか興味深い論点を含んでいるのである。

ところで、これまで触れてきたような諸見解は、わが国以外のヴィゴツキー研究者の中にも認められる。すでに触れたヴァルシナーの他にも、オランダのファン・デル・フェールも同様の視点をすでに提出している⁽¹¹⁾。

彼はヴィゴツキーのもとでルリヤたちが行なった例の有名な中央アジア調査を批判的に検討している。ファン・デル・フェールは、ヴィゴツキーやルリヤたちが、その調査を行なったとき、彼らは明らかに、科学・技術によって代表される近代ヨーロッパ文明の優位という前提の下に研究を進めたと考える。すなわち、言語や計算体系などの記号の操作こそが文化の中核であり、それらによって担われた科学・技術の発展こそが文化の発展であるとみなした。当然、そのような観点からすれば、中央アジアのイスラム文化圏は文化的には遅れた地域であり、ヨーロッパ式の近代学校教育を導入して文盲一掃教育を行なわねば、この地域の近代化、当然その当時においては社会主義化のことであるが、はありえず、社会主義的人間の創出もありえないと考えられた。ファン・デル・フェールは、このようなヴィゴツキーの文化の捉え方は、果たして正しかったかという問題を提起する。ヴィゴツキーは、文化の技術的進化の側面のみ文化概念を限定してしまっており、社会的な側面を軽視してはいないか、と言うのである。

さて、以上見てきたように、わが国の認知心理学者の一部も巻き込んで、従来、近代西欧の知の一つの分野であった心理学の中で、知のパラダイム転換とも言うべき知の捉え返し、あるいは人間観の転換が、いま着実に進行しているように私には思われる。

では、それはどのように行なわれているか。以下に、今までの議論の中から出てくるそのイメージをまとめておこう。

第一は、反近代あるいは超近代の思想を核としている。それは、反科学・技術であり、反生産第一主義であり、また学校教育とは無縁なところに成立する知を対象としている。第二に、非西欧であり、第三世界的であるような世界、わが国の場合であれば伝統文化の世界を対象とする。また、それは庶民の「生活集団」における「生活知」とか、「常民の知恵」の世界でもある。第三に、非言語的世界、肉体的世界を問題とする。それはまた、潜在意識の世界であり、以心伝心により、パトスの知により伝達される世界である。第四に、反男性主義、フェミニズムの世界である。第五に、人間と自然との調和の世界、エコロジーと共同体の世界である。

現在、心理学の世界に生じているパラダイム転換のイメージは、おおよそこのような見取り図になるのではなかろうか。

さて、少し横道に逸れてしまったが、本稿では技能知に焦点を絞って、職人と伝統芸道の場合を対象にして、以上述べてきたようなことが当てはまるか検証していくことにしたい。

2 方 法

職人では、畳職人（男・大正四年生まれ・調査当時七五歳）と、桶樽職人（男・大正七年生まれ・調査当時七二歳）を対象に、伝統芸道では琴の教師（女・大正十二年生まれ・調査当時六七歳）を対象にして、聴き取りを行なった。聴き取りに要した時間は一時間前後である。調査を行なった時期は1990年11月である。

3 結 果

(1)畳職人の場合：

江戸時代から360年続いている畳屋で、本人が12代目である。現在、妻、息子夫婦、孫と同居している。以下に、インタビューの抜粋を示す。

「小さいときから、ご自分の家の由来みたいなものには興味をおもちだったのですか？」

「そうですね、お堀の前の所に久松高等小学校ちゅうのがあって、それをしまって、家の仕事を手伝いましたけえな。要するに、小学校6年しまって、高等小学校っていうのが2年あるですがな。それで2年をしまって、そして家を手伝えちゅうことになって、兵隊までな、何かするにしても兵隊までは家の仕事を手伝って、それからまた考えが違って何かするだったらするとしても、兵隊までは家の仕事を手伝えちゅうことで手伝いましたな。覚ええましたな。まあ、結局、結果においてそれがまた他のほうにせんらんような状態になって、物資が不足してな、なかなか畳屋もできんようになりして、他の所の仕事をしたり、二、三変えましたけどな。鳥取の大火でみんな焼けてしまっ、まあちょうど親父も歳をとるし、それでまあやろうかなあということで、畳屋にまたもどりましたけえなあ。そういう点から言うちゅうと、学校を結局6年と2年して、それから20まで家の仕事を手伝ったわけですけえな。」

「子どもの頃からお父さんのお仕事を見ておられた？」

「ええ、見とりました。家の庭で仕事をやりようったですけえな。うちの親父がやりようったし、職人がひとりきょうりましたな。それで忙しいけ、ちょっと遊びに出ずに手伝わないけんぞちゅうなことでしようったこともありよったけどな。」

「それはいくつぐらいのときからですか？」

「畳の床をする機械がありましたろうが、藁を並べたりしとる、あんなのがまあだいぶ進歩したのですけども、わしらが家の仕事を手伝う前後ちゅうか、高等小学校ぐらいかな、の当時は、まだ動力で回らずに人間の力で回しようったけえな、縋ようったけえな、それで、あのハンドルちゅうかなんかを、こうやって回さならんことがありようりまして、そんなことを手伝ったりしたような記憶はありますわな。」

「それは、自分のほうから意識して手伝っていたんですか？」

「いやいや、それはないですわいな。遊ぶほうに（笑い）、同じようなもんがこの町にもようけおったもんですけえな。この町内のほうで遊んだり、今いうこの裏のほうがやげん堀ちゃあながあって、そこで魚とったりな、それから袋川あたりにも遊びに行きようったし、まあ学校の周辺で遊びようりましたしな。それから、お城の久松公園、あの付近でもよう遊びに行きようりましたしな。」

まあ、進んで、その当時、仕事手伝わないけんがようちゃんな気はなかったなあ。」

「将来、お父さんの仕事を継ぎたいなあっていうことは思われたですか？」

「将来なあ。まあ、さっきお話したような具合に、母親がな、職は習っておけばそれをずっとやりゃあよし、やらなあやらいで、また他の職にすわっても、兵隊検査までは家の仕事を覚えとくがええって言ってな、家の仕事をさわったちゅうか習ったちゅうかな。それで、その当時は満鉄とか北交通とかな、海外のそういうところに行かれる人の募集をやりようりましたわな。わしらも、そんなもんでも行きたいなあ、というような気持ちを持ったこともありますな。それが、母親が、親が言うことだし、まず兵隊検査までは家の仕事を手伝おうちゅうことで、手伝いましたな。」

「そういう教わり方というのは、順序立てて、はじめに道具の使い方からというふうにですか？」

「まあ、そうですね。わからんことは聞くし、教えてくれるし、それからいきなり難しいことを聞いてもできんし、まあ、できることからできることから、こっちのほうで積極的に習っていき、聞いていき、見よう見まねっちいて言いますわな。こんな時にはこんなふうにしようとかなにかかんとかいうことで、今もう機械でみんなやってしまうことですけえな。この畳のへりを縫いつけるのにしても、表をこうやってはるのにしてもな、みんな手細工でやりようったですけえな。20で兵隊検査、これが昭和10年だろうかな、昭和10年の12月10日に出ましたけえな。」

「兵隊に行かれるまでには、技術的にはどれくらいになっておられましたか？」

「技術的かな。だいたいまあ、何にもこなせるように、何にもできるようになつてりましたなあ、ええ。だけえまあ、この畳屋、その当時で言うちゅうと、この畳の台を藁で、藁をたてよこ、たてよこにして並べたりしてこしらえますわな。それから、それぞれさしてもらう家の部屋の寸法を、部屋の大きさを計ってな、部屋に歪みがないかってなことを見て、それに対して寸法を割り付けてな、割り付けてちゅうか、六畳であればこうやって、六畳でこうやって畳をひくようなかっこうにして、これの幅はこういうふう寸法をしようということを決めて、それに向って、表をはったりへりを縫い付けたり、まず縫い付けて、それからこうやってひっくり返して、こんだあ、これをとめるとかいうようなことで、まあ、兵隊になるまでにゃ、兵隊にでるまでにゃあ、だいたいできるようになつてりましたなあ。」

(中略)

「初めは、見よう見まねで作っていかれて、わからないことが出てきた時にはどうされましたか？」

「そうですね、その寸法的なもの、それからそのする仕事のほうでの、まあ、わからんことというような、まあ結局、親父が知つとることは教えてくれますしな、だけえ、他のほうで技術をあんまり習ったということはないなあ。」

「じゃあ、わからないときは、お父さんのほうに尋ねるということですか？」

「まあ、だいたいそういうようなことだったですがよう。」

「自分がひとりで作られたものを、お父さんに見ていただいたときに、お父さんはなにかおっしゃいましたか？」

「そうだな、あんまりほめられたっちゃんなことはないな。まあ、そういうふうにできりゃ普通だぐらいなことでしょうかな。」

(中略)

「じゃあ、あまり言葉で教えるっていうような、叱つたりとかっていうようなかたちでは？」

「ええ、まあ包丁で落とすときはこういうふうにして落とすほうがあええとかな。こういうふうな具合の針の持ちようして繕わにゃ手を傷るとかな、いうようなことで、ちょいちょいと聞いた

りもしたことがあるけど、まあ、やっぱし、しょうるのを、職人が、ゆきつつあんでいうのが、職人がおったですけえなあ。そんなんの、親父やあのしょうるのを見よう見まねで。それから、忙しいときにはまた、畳の職人がおんさったですけえ、そんなのに来てもらって手ごうしてもらったりしょうりましたしな。まあ、見よう見まねっちゅうほうでしょうな。まあ、家におるだけえな、小さいときから見とるだけ。」

(中略)

「お父さんのほうから教えてもらうときの思い出とか、ぱっと思ひ出すようなものがありますか？」

「そうだなあ、ぱっと思ひつくようなことはあんまりないで。」

「じゃあ、わりとたんたんと覚えてこられたっていう感じですか？」

「小学校をしまい、高等小学校を2年行きて、それからまあ、家の仕事を手伝いだいたच्चゅうことですけえなあ。やっぱし、一緒に小さいときから寝起きしちゃ、店で仕事しようったわけですけえなあ。前の家もな、こっちのほうに住まいでそれからその店のほうが仕事場だったですけえなあ。必ず出入りすりゃあそのところを、仕事しようるところを、脇を通って外に遊びに出ようったし、学校に行きようったしな。だけ、だいたいしょうることもわかっつたしな。」

「仕事と生活の区別みたいなことはあまり感じられなかったのですか？」

「何時から仕事にかかるっちゃあなことはなかつたな。まあ、わしらもいたって横着なほうだし、家からそんな具合でしとるけえ。人によつたら、建具を習おう、あるいは、大工さんの仕事を習おうच्चゅうことになる、その家に行きて、まあ、建具屋さんなら建具屋さんのお家に行きて、そんねで寝起きさせてもらいつつ、習ようったですしな。わしの場合は、朝飯を食べて、子どもが学校に行くのに間に合うような具合の朝ご飯を食べて、子どもは学校に行くし、妹や弟が。それから、ま、仕事を手伝おうかっちなことか。それから、夕方は、ま、暗いぐらいまでやりようったな、仕事は。昼も、昼飯休みが一時間ぐらありようったし、忙しいときにはもう、また何日までには納めにゃいけんっちなことで、急ぐ時にあたりゃ、夕ご飯食べてからでもまたやりようったしな。」

(後略)

(2) 桶樽職人の場合：

祖父の代からの三代目である。妻と同居しているが、二人の息子は会社員となって同居している。以下に、インタビューの抜粋を示す。

「この仕事に興味とか関心とかを持ち始められたのはいつ頃ですか？」

「もう関心もへちまもない。親が、後を継ぎってことで、つい抵抗なしに仕事にかかったもんですけえね。後を継いだもんですけえなあ。」

「子どもの頃は、お父さんがやっておられたのをずっと見てこられたのですか？」

「おじいさんや親父がしょうって、それに弟子さんがな三人寄ったりして、使って、教えておったもんです。大勢しようったです。なぜかっていったら、習いたいっていう人があったそうです。それをした頃は、親戚中が、まあ、親戚中っていても親父の弟、おじいさんが、この職を継いどるし、おじいさんっていうのがやっぱし桶屋だし、その子どもが桶屋だして、まあ、親戚中が桶屋で、そういうことで大きな仕事しようったですが。酒屋さんの仕事の、こう大きい仕事で、背の高い六尺くらいある大きな、」

「酒樽？」

「酒樽っていうか、仕込み桶っていうかな。今でもあるかもしれんけどな、福寿海や君司に行かされると、大きな桶がある。そういう桶をしたり、それに使う道具をしてくれってことで作りよったですけど。だけど、だんだん時代が変わってきて、酒屋さんも使われんようになって、ドラム缶のような大きな缶に仕込むようになって、使う道具もカネのもんができたりプラスチックのもんができたり、酒屋さんが使われんようになって、庄屋さんでも桶を使よったですけど、それも使われんようになって。昔は、家庭に入るっていうと、桶がどうしても必要なものであって、お嫁さんに行くときにはこういうたらいですな、大たらい、中たらい、小たらいと、三つ。嫁さんに行くときには、三つ揃えてもって行きよったです。まあ、二つの家もありよったですけど。そういうたらいが使われるし、台所に入るとおひつがあって、ごはんを釜で炊いたのをおひつにあげて、そのおひつからごはんをとって食べると、ごはんがおいしいし、米をとぐには米とぎ桶っていうようなもんがあったり、なんぞかんぞ桶の道具があって、顔洗うには“はんぞう”って言って、顔洗う道具があったりして、どんねにもあったもんです。で、とても繁盛したっていうか、忙しかったわけです。だけえ、桶屋さんになるもんもたくさんあったわけですからね。」

(中略)

「じゃあ、お子さんのときは、おじいさんとお父さんがやっておられて、お弟子さんもおられたという状況の中でお育ちになったんですか？」

「おじいさんから親父が後を継いで、それが若い弟子さんを教えながら、まあ、その仕事を発展するように元気だいてしよったわけだけど。」

「お子さんのときに、お弟子さんと交じってやられたというようなことはありますか？」

「そういうことで、忙しいときは来てもらって、うちから仕事はかどるからな。大きい仕事はようけあるときは、みんなが寄って、ちょっと来て手伝ってくれって言ってしたり、仕事をするのに、ああいう酒屋さんや庄屋さんや味噌屋さんで大きい仕事があるときは、そんねに行つて大きい仕事をしたり、」

「そういう所に、実際に子どもの頃行かれたような思い出はありますか？」

「わしか、まあ、高等小学校ちゅうと16ですかな、卒業したときに、卒業した当時はまあ、教えてもらうために、あっちこっち連れていってもらってしよったですけどな。」

「そういう桶樽屋さんと一緒に連れていかれてって感じですか？」

「そうなので、まあ、なんでも来てもらったり行きたりしよったです。鳥取市の旧市内に昭和の初め頃には、34、5軒もあったです。それがまあ、年寄になって亡くなったり、若い衆はやめて、一軒だけ大工さんになつたりと、現在ではうち一軒という具合で」

「この仕事をどうしてやっていこうって思われたのです？ やっぱり、もういやおうなしにみたいな感じですか？」

「いやおうなしに。まあ、ごっつい嫌いでもなかったし、親がせえって言ったことは親孝行にもなるしってことでずっとそれを覚えてしたわけですけど。」

(中略)

「技術的なことを教えてもらうっていうのは、実地で手とり足とりみたいな感じで教えてもらうんですか？」

「仕事をしながら、あれをこうしないけんあせないけんって具合でな。その道具の使い方からなにからな。これするにはいろいろ変わったもんがあるですけどえな。けど使う道具の使い方から教えてくれるんです。」

「その仕事を自分の仕事としていこうと決められたのはいつ頃ですか？」

「もう決めるも決めんもないですけえな。学校卒業するとすぐ、学校卒業する前、まんだ学校行きようの間から、かんなくずり教えてもらったり、自分がしたりしようったわけですけえ。桶屋、前からしょうかってどころじゃないです。はじめからするかっこうで、ずっと子どもの時からしたわけですけえ。自然に後を継いでしたわけですけえ。」

「もう、お父さんとおじいさんとかお母さんとかは、もう、桶屋さんになられるっていうふうに決められてたんですか？」

「ええ、決めておったでしょう。兄貴だけ、格別、後を継いでもらわにゃならんちゃあなんで、親父がな思っったわけです。次男も桶屋はとて困るようにならせんからということで、次男のわしのおとりも桶屋をさせたわけですけど、途中にプラスチックに変わったわけですけえ。転業するようになったわけです。まあ、うちはどうのこうの続いて桶屋しとって、まあ、現在になつとるわけで。」

(中略)

「お父さんと仕事を一緒にされているときに、ご自分からすすんで仕事をするっていう感じが、それともお父さんが一緒にしようってかたちでされたのか、どちらですか？」

「いや、おなじことですが。親は、教えるわけですし、生活があるわけだけ、仕事受けて、親が受けたらそれをせないけんわけだし、するっちゅうことは習いながらしょうるわけだけな。」

「手伝ってくれってことは言わなくて、自然に？」

「自然に桶屋をしようと思つとるからするわけだし」

(中略)

「お父さんから教えてもらうとき具体的にどんなふうに？」

「それは難しいな。話でできることじゃないし、実地でせんとわからんですけえ。道具の研ぎ方からなにからってことは、いろいろ難しいことがいっぱいあるですけえ、そんなことは話せれんですが。わからんですが。ただ親からこういうふうにせえってということは、仕事の内容を聞いて、自分で試みて、仕方が悪かったら、これいけん、こういう具合にせえって、つい手で教えてもらったりするぐらいなことですけえ。」

(後略)

(3) 琴の教師の場合：

女学校の頃、通い弟子として琴を習い始める。現在は、自宅で琴を教えている。夫、娘、娘婿と同居している。以下に、インタビューの抜粋を示す。

「習い方というのは、順序立てて、初めは礼儀作法から、だんだん難しいのをつて感じですか？」

「自然にお琴の前に座って両方が挨拶するような、『これからお願いします』、『じゃあどうぞ』っていうような、そういう挨拶とかね。そういうことは、もう自然の常識でしたから。まあ、そういうことっていうより、まず昔だったら、最初、お手本っていうのを、“さくら”から入りましたね。それで、一曲を何週間か何か月かかかって、次のにいきたもんで。その間に、自然に礼儀作法とか、相弟子さんが来ておられたら自然に挨拶してるとかね。それから、帰るときには、ありがとうございまして帰るのはもう常識のことですから、そういうことは自然に目で見て耳で覚えるような時代でした。ことさら、お茶やお花と違って、こういうほうでは礼儀作法っていうのはなかった

ようですけど。」

「じゃあ、先生から教えられるときに、こう向い合って、先生がされるのをまねしてって感じですか？」

「ええ、そうそう。まずは、耳で音をとらなきゃいけないんですね。ま、音楽っていわゆる音でしょ。まず、先生の弾かれる音っていうか、曲の流れと、それから手巧っていうか、手の使い方を、そんなのをまず見たり目で見て耳で聴きながら覚えてきたって感じですけど。……暗譜稽古っていうのと、譜本稽古っていうのがありますね、二種類、それで、暗譜稽古っていうのは、初めから本を見ないでとにかく師匠のすることをまねするっていうかね。最初の段階はまねをして、先生が唄って弾かれるのを一生懸命見て、そしてそのとりにこっちでまねをしていくって感じですよ、最初は。だから、本稽古っていうのは、最初からちゃんと譜本を前に置いて、そしてもちろん先生は暗譜ですよ、昔の先生ですから。だから、むこうが弾かれるのを、それと照らし合わせながらこうして弾いていくのと、ま、二種類ありましたわね。」

「その際、先生は、ここはこう弾くんだよっておっしゃりながら弾かれたりするんですか？」

「昔の先生というのは、もう一世代前の先生でしょ。だから、その先生のお師匠さんっていうのは、昔いわゆる明治の初期頃からした方からみんな習われた。……昔はだからこうしてあししてなんていうのはなかったらしくて、とにかく弾くだけです。それを、こっちが目で見ると耳で聴いて、こういうかっこうしてこういうふうには弾けばできるんだなあとか、よくよくわからんときは、先生どうでしょうかって、こっちから質問するときはありますけど、そういうことは非常に昔の先生は嫌われるんですよ。だから、わたしたちも、先生のなさることを、一生懸命目で見て覚えてきました。最近の若い人っていうのは、理屈っていうのか学理っていうか、講義っていうか、そういうもんを口で言いながら教えないとついてこないですよ。"さなり"なんて、どういうふうにしたらいい具合にできるでしょうか、なんて、むこうから質問するんですよ。ま、だから、最小限、"さなり"っていうのは爪をこういうふうにもって、こういうふうにしたらできるんですよっていう、その講義だけは一応しますけど。後は、自分で練習しなきゃどうしようもないことでしょう。ところが、今の若い子は、そういうことから入って実技に入るっていうかっこうですよ。」

「ご自分がうまくできたって思ったときとか、うまくできなかったなと思いながらやってたときの先生の反応はどうでしたか？」

「当然、一、二へんや三へんや五へんはへたくそで、先生はなんでもどかしいなって思われるけども、そんな昔の先生というのは手とり足とりっていうふうには教えてくださりませんでしたね。とにかくその域にいくまでは、自分で研究して自分でこう登っていくのを待ってるかっこうですね。そんなに自分のほうからあーだこーだ、ほらほらってことは別になかったですよ。だから当然二へん三へんはへたなのはわかってますしね。ぎこちないのはわかっておられるから、黙って、なんべんか、それで最後の仕上げになって、おかしいところがあればこうね、ひろってこう注意はしてくださるけれど、ほとんどそういうことは、ま、他の先生は知りませんが、わたしの習った先生はそうでした。」

「うまくできたなっていうときにほめられたことは？」

「たまにね。後で、お茶を飲みましょうかっていうようなときに、だいぶ歌がうたえるようになったとかね、それから、だいぶ弾けるようになったとか、だいぶ味が出てきたなっていうようなことは、たまには言われますけどね。お稽古の時には、そういうことはいっさいありません。ま、当然、へたなのがわかってますしね。たまに、それももう、何十年もたってからの話でね。」

(中略)

「表現の仕方というようなことは、どういうふうに習ったりしましたか？」

「曲についてですか。わたしは、ほとんど古曲のほうなんですよね。古曲と新曲というのが、お琴ではありますけどね。明治からこっちに作曲されたいわゆる新曲、今で言うと現代邦楽っていうんですか、そういうのになるともう洋楽と一緒に、ここがなんとか、ここがちょっとあれにしてとかいうような、わたしはまことにそういうのが苦手です、学理っていうかそういうものが。わたしは、古典一般できたものですから。だけど、ただ、一曲の中には山あり谷ありっていうことがありますよね。だから、歌のおしまい、いわゆる手事っていうところに入るときには、ちょっとゆるんでそこからのせなさいとか、そこはちょっと弱く弾いたほうがいいですよ、それからそこは、三弦場に入る音ですから、そこはちょっと軽く弾いたほうがいいですよとかね。そういうようなことはとにかく、細かく教えてくださいませけれども、それはもう何年もたって、自分がだいたい古典というものが理解できたことであってね、初めからそんなことごちゃごちゃ言ったって、わかりやしません。むこうさんはですよ、むこうはとにかく書いてある譜の音を糸にもってくるだけがせいっぱいでしょ。だからとってとって、そんなことはもう2年も3年もしてからじゃないとね。……………どんな小さな曲でも先生が弾かれて、ゆるんでこう弾かれたりするところがあると、ああ、こういうところがゆるいんだなってことはわかるでしょ。むこうが何もおっしゃらなくてもありますし、ここはちょっと軽やかに弱で弾くんかなあ、そういうふうに弾きようられるから、なあこっちも、そういうふうにしましうってことで、そういう感じで最初の頃は習います。」

(中略)

「お師匠さんに教えてもらっている立場から、ご自分が自立したなあと感じられた境目のようなものは何かありましたでしょうか？」

「まあ、最後の仕上げになってね、あそこは先生の手拍子外したりしてがちゃがちゃしたなって思うと、今度お稽古に行くまでにそこ見とってつまんで一生懸命弾くでしょ。そして、行きて、最後の仕上げなんかで先生と一つも手が違わずにきれいに先生のとうりについていたら、ああ、弾けたな、これで手に入ったなと思うし、最後は合奏っていうので仕上するわけですね。お琴ならお琴だけですんだらはいきようならじゃなくて、必ずお琴には三弦っていうものがありますからね。六段の調べ一つでも三弦とお琴と両方あるから、お琴がすんだら先生が六段の三弦を弾いてくれ、それにさっとこっちが合わせ、それできちっと両方があって、それで初めて卒業しますよっていうことですね。だからまず、仕上の段階できちっと弾けたら、ああもう三弦ともよく合わせるようになったし、そのうちに機会があれば、尺八とも合奏しますよね、そういうときにきちっと合うと、ああこれで弾けるようになったなと思って、自分なりに喜ぶですがな。」

(中略)

「お稽古をされていたときの、お師匠さんとのやりとりなんかで、思い出かなにかありますか？」

「とにかく、私の師匠は先生でしたからね、そういうやりとりなんていうことは、……………叱られたことはいっぱい覚えてますけどね。だからとにかく昔のお師匠さんの型っていうか、とにかく黙ってついていかなきゃいけないわけですわね。だから、そんなやりとりをしたとか、ま、弦の上では別ですよ。わからないところはどうでしょうか、こうでしょうか、こういうふうにかかっていうようなことはたまにはききますけどね、それ以外のことはちょっと。何を言われてもはいはいで黙ってるあれでわたしたちはきましたから。」

(後略)

4 考 察

生田久美子は、技能と区別された「わざ」(生田は、「わざ」は身体的なものである技能に精神的なもの加わったものとして理解しているようであるが、その点では渡植の「技能知」と同じものをさしていると思われる)の習得プロセスを次の三点にまとめている。第一に、「わざ」は心身合一の中で、すなわち、全体的な生を営むものとしての人間において、習得される。第二に、「わざ」は、日常生活と稽古との境界が存在しないような状況の中で、すなわち、生活空間と学習空間とが連続している中で習得される。第三に、「わざ」の学習プロセスは、見よう見まね、以心伝心である。もっとも、生田の場合は、「わざ」を武道と芸道に限定して考えていて、職人とか主婦の場合はまったく考慮していないのであるが。

さて、わたしたちが調べた職人と伝統芸道の場合も、生田の指摘している諸点がほぼ当てはまるように思われる。

まず、職人のほうから見ていくと、畳、桶樽の両者において共通であるが、家の職業すなわち父親の職業の後を継ぐということ、半ば強制的に、あるいは自然にそうするものだというような感じで受け取っているという点が、注目される。それは、彼らの生まれ育った家庭が、その親戚も含めて代々、その職業を継いできたということも、大きく影響しているであろうし、また、生活空間と仕事場が隣接していて、遊びに外出するときとか、学校への行き帰りに、常に父親や祖父、あるいは職人たちが仕事をしている傍を通らざるをえず、父親や職人の仕事がいわば家庭生活の一部であったことなども大きく作用しているのであろう。そのような事情は、畳職人の次のような表現によく表されているように思われる。彼は、畳屋の技能を習得することを、「家の仕事をさわる」と言い表わしている。彼にとっては、家庭生活から切り離された特別な仕事が存在するわけではなく、家庭の中にいわば埋め込まれたものとしての仕事にとりかかるのは自然なことであった。

この点は、生田が「世界への潜入」と名付けている概念と同義である。すなわち、生田は、伝統芸道へ入門した弟子は、それは内弟子だろうが通い弟子だろうが問わないが、師匠の家で、自分が稽古をつけてもらう以外に、行儀作法を学び、他の弟子たちと会話し、稽古を見学し、師匠のさまざまな日常生活と関わり、また師匠の家の中にあるさまざまなものと関わるなかで、師匠の生活リズムを体得し、それが芸道の習得に暗黙のうちに大きな影響を与えていると考えて、それらを、「世界への潜入」と総称している。

わたしたちが見てきた職人の場合は、この「世界への潜入」がすでに生まれたときからおこなわれているのである。

次に、習得プロセスの点でも、同様な特徴が見いだされる。すなわち、見よう見まねが基本であり、わからないときに尋ねるだけである。そのために、桶樽職人が言うように、どのように教えてもらったかを言えといわれても、そのようなことは「話ではできない」のである。ここは、明らかに非言語の世界である。

次に、琴の教師の場合も少し見てみよう。わたしたちの調査した女性は、通い弟子として琴を習った場合であり、生田の言う「世界への潜入」という部分は明瞭には出てきていないけれども、習得プロセスは生田の説とまったく同じである。たとえば、まず耳で音を捉えることから始まるとか、目で見、耳で聞いて、まねる(暗譜稽古)とか、どうしてもわからないときに、尋ねるなどと述べ

ているのは、これまでわたしたちが述べてきたことと符合するのである。これらのプロセスは、生田が紹介している次のような例ともまったく同じである⁽¹²⁾。

「役者が芸を教わるってことは、正面切って教わりに行くということより、見て覚える、ってことが本筋ですね。」(歌舞伎・中村勘三郎談)

「……ただいまのようにね、さあ教えてやるちゅうて、こう、前もって、こうしなさい、ああしなさいちゅうにやないんです。ただ、人に稽古してはんのを聴かしてもらい、そこで『やってみい』ちゅうて『そんなこと云うてる』ちゅうて、叱られるのが試験みたいなもんですね。」(三味線・鶴沢寛治談)

「叔母の稽古は、私たちは子どもですから、本を使いません。無本の稽古です。」(鳴物・田中伝左衛門談)

さらに、わたしたちの調べた琴の教師が、理屈ではなく、とにかくお師匠さんに黙ってついていくと述べているのも注目される。生田によれば、伝統芸道の習得プロセスでは、入門者はまず、師匠の「形」の模倣をとにかく懸命に繰り返す初期の段階から、そういう自分を客観化する次の段階、そして、最終的には、前の二つの段階をさらに客観化することによって師匠の限界を打ち破り、自分独自の新しい「形」を創造していく段階の三段階あるとしている。琴の教師が述べているように、理屈抜きでとにかくまねるといふ段階は伝統芸道の世界では必要不可欠なプロセスであったのである。

しかし、この点は、佐伯の「文化的実践への参加」とは、その視点を異にしている。佐伯の場合は、師匠と弟子との間に上下の関係がなく、まったく対等の関係で、ともに文化的実践へ参加することにより、新たな創造的営みが促進されるという点を強調するわけで、伝統芸道の場合のような、教えるものと教えられるものというような、身分の上下関係は想定していないのである。この点は、伝統芸道の教育プロセスを評価するときに、伝統芸道のもつ限界を表しているかもわからない。

最後に、本稿の結論および今後の課題をまとめておこう。

①技能知は生活知である。すなわち、仕事空間と生活空間が未分離のなかで習得されている。大田の言うところの、“なりわい”のなかで育まれる。

②技能知は、心身合一のなかで、すなわち、生田の言うところの全体的な生を営むものとしての人間において、習得される。これはまた、大田の言うところの人格知でもある。

③技能知の教授・学習プロセスは、見よう見まね、以心伝心を基本としている。言語的教示はめったになされない。また、弟子のほうから質問するというのもめったになされない。

④職人の場合と、伝統芸道の場合の共通点と差異を明らかにしていくことが、今後の課題であろう。

文 献

- (1) 渡植彦太郎 『仕事が暮らしをこわす：使用価値の崩壊』 農文協，1986
同 『技術が労働をこわす：技能の復権』 農文協，1987
同 『学問が民衆知をこわす：科学の内省』 農文協，1987
- (2) 大田堯 『教育とは何か』 岩波書店，1990
- (3) 中村雄二郎 『魔女ランダ考：演劇的知とはなにか』 岩波書店，1990
- (4) イリイチ 『シャドウ・ワーク』 玉野井芳郎，栗原彬（訳） 岩波書店，1990

- (5) 山本哲士 『コンビビアルな思想：メヒコからみえてくる世界』日本エディタースクール出版部，1990
- (6) 佐伯胖 「なぜ，いま『わざ』か」(7)所収 pp145-163
- (7) 生田久美子 『「わざ」から知る』東京大学出版会，1987
- (8) 高橋恵子，波多野誼余夫 『生涯発達心理学』岩波書店，1990
- (9) Valsiner, J. Human development and culture : the social nature of personality and its study, Lexington Books, 1989
- (10) 稲垣佳世子，波多野誼余夫 『人はいかに学ぶか：日常的認知の世界』中央公論社，1989
- (11) René van der Veer The concept of culture in Vygotsky's cultural-historical theory, Paper presented at 7th European CHEIRON Conference, 1988
- (12) 生田久美子 「からだでわかる」，『岩波講座 教育の方法 8』1987所収 pp76-107

(1991年8月31日受理)

